

1 誰にとっての不都合な真実か

●アル・ゴア氏の訴えた環境への警鐘

2007年に大きな話題になった映画「不都合な真実」は元アメリカ副大統領のアル・ゴア氏が世界に訴えたもので、同名の本も刊行されています。この映画は世界中で注目されました。この映画と本によってアル・ゴア氏はノーベル平和賞を受賞しました。

アル・ゴア氏の訴えたことは、人間が活動することによって化石燃料が大量に使用され、二酸化炭素濃度増加を招くという事実と、地球温暖化の関係性の高さを根拠に、これからおこる地球環境変化の可能性と大災害の危険性です。

●アメリカと中国の不都合

1997年に日本の京都において第3回気候変動枠組条約締約国会議が行われました。そこで、地球温暖化防止のために二酸化炭素も含めた温室効果ガスの削減目標を決め

ました。

アメリカは自国の産業が衰退を理由に削減目標を設定しませんでした。化石燃料に基づいた世界最大の二酸化炭素排出国であるにもかかわらず、世界最大の経済大国アメリカはこの条約に消極的でした。

もう一つの世界第2位の温室効果ガスを排出している中国も二酸化炭素削減を目標にしませんでした。まもなくアメリカを抜いて世界最大の二酸化炭素になるこの国は毎年、高い経済成長率を誇っています。中国は、これから先進国になろうとしているのに、この条約にはとても納得できないものだったからです。この2国にとっては、それぞれの理由で「不都合な真実」がありました。

現在、地球温暖化の原因が温室効果ガスであることは確かでしょう。このことが誰にとって不都合なのかを私たちはよくみきわめなければなりません。

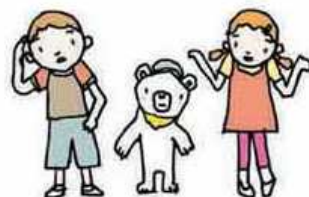


波紋を呼んだ「不都合な真実」

アル・ゴア氏が発表した「不都合な真実」に対してイギリスの中学校校長は、この映画は間違いの多い洗脳教育であると裁判に訴えました。グリーンランドが解けて海面が6m上昇するとか、ツバルなどの島々が温暖化の影響で沈むなどは根拠がないなど9つ事項についてその科学的な間違いを裁判で指摘しました。

しかしその間違いの指摘も間違いであるという報告もあります。そこでは、ゴア氏は地球温暖化が唯一の原因であると理解されるような映画の内容にしていますが、科学的な証明があると断定していません。可能性が高いと世界にむけて警鐘をならすことはしましたが、科学的な誤りが指摘されるような内容にはなっていないとゴア氏を擁護しています。

このほかにもこの話題を呼んだ「不都合な真実」には、さまざまな波紋を呼びました。何が本当の真実か自分の目で確かめることも重要です。



京都議定書ってなに？

1997年、京都で開催された「地球温暖化防止会議」に世界中の国々が集まって決めたルールのことです。今の地球は、二酸化炭素などの温暖化ガスのおかげで生きものが暮らしやすい気候になっています。しかし、人間が石炭や石油などの化石燃料を使うようになってからどんどん温暖化ガスが増えて地球が暖まってきています。温暖化ガスがそのまま給っていくと、南極などの氷が溶けて洪水が起こるなど、生きものの住みかなくなるなど、たいへんなことが起こるおそれがあります。そのため、2005年2月16日に発効されたのが「京都議定書」です。日本は1990年度の温暖化ガス排出量より6%を2012年までに下げなくてはならないことになっています。

